

懐かしき昭和と自然体の邂逅

敗戦後から昭和三十年前後、土門拳は東京や静岡で遊ぶ子供たちと共にいた。ぶら下げたカメラをいじらせ、さんざつばら遊び、ずつと傍らに居続け、子供たちの意識から自分もカメラも消えたと思つた頃、シャッターを押ししたという。同じ時期、石田榮は高知の片隅で、農村や漁村に通い詰めていた。みんなと同じような服を着て、自分の子供を連れて海辺や畑や作業場を歩き、そこに働く人々の素顔と暮らしを撮り続けたんだ。

会うこともない二人が、会うはずもない関東と西国で、屈託のない日々の営みを同じ時に追い求めていたのは、きつと偶然じゃないね。ポロクソに痛めつけられた暗黒の時代の傷は傷、でも生きていかなくちやならな



東京・上野公園で撮影した「子供たち」の一枚。土門拳の代表作の一つ。昭和十一年（一九三六年）撮影。東京国立近代美術館蔵。複製権は東京国立近代美術館に帰属。石田 榮 高知 高知市立美術館蔵。2017.4.13-28 撮影：イ・イ・エ

い。泣いたり怒ったりしても、目の前にご飯は出てこない。石田さんが写した男たちの逞しい四肢は、気の遠くなるような同じ仕事の繰り返しが生んだ勋章。土門さんが写した子供たちの屈託無き笑顔を支えているのは、必死で彼らを育てている親の愛情。撮ろうと思えば暗い写真だつて撮れたらうけど、しない。それを見せるのは簡単。でもない。二人はファイナダーの中の笑顔の奥に、普段の暮らしの大切さ尊さ、そして良き未来を見ていたのかも知れない。



土門拳写真展 昭和のこども

あの頃、笑顔があふれていた。

「エスエヌアートセンター」

高野金次郎商店

親切第一 平成29年5月号

版元：東京ペンギン堂本舗・高野ひろし 豊島区北大家2-26-2
fax:03-3917-1949 RXM04421@nifty.com

協力：高島平電腦研究所、築地河岸工房
関連ウェブ：各種検索エンジンで「東京ペンギン堂本舗」検索すると
ボーータルサイトに辿り着けます。http://shiosenbe.booc.jp/

勝手にお気に入り5

東京駅に行くついでに確認

したくなる物件ベスト5

駅開業時から残る山手線

ホームの屋根を支える柱

駅弁屋で売ってる西国国技

館の焼き鳥

グランスタの隅っこにある

「丸ノ内坂」の命名板

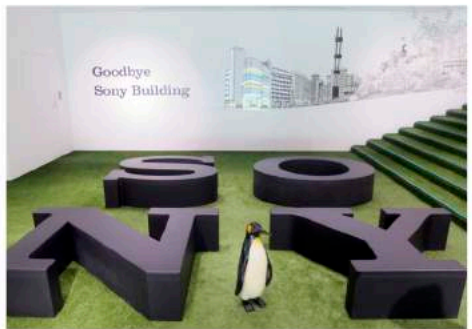
吉田カバンの出店、ポイ

タースタンドの品揃え

・新幹線の0キロポスト

銀の輔銀座千枚

あくあ、終わつちやったね、ソニービル。サヨナライベント期間中に、何回通つただろう？ どうせガチャポン目当てだろうって？ うーん、即座に否定できない…。歴代のエポックメイキングなソニーの商品をマスコットにしたストラップは、高いけどよく出来てて、でも一日ひとり一回って決まっていたもんだから、欲しい物が出るまで随分通つちやった。



それにしてもソニーの製品はデザインが格好良かったね、あの時代までは。

あのくるくる周りながらフロアを変えていく中二階方式みたいな造りが、先ず楽しかった。各階で雰囲気を変えてみる切り捨てないで、前の階の余韻を持って次の階に移動するって、画期的な設計。渋谷の東急ハンズが出来た時、ソニービル方式だつて思ったもの。

地下のソニープラザ、マキシム・ド・パリ、そして中古レ

コードのハンター。一階ブリティッシュパフのカーディナル。どこも个性的で、上の階に行かなくても地下だけ見るなんてのもあったっけ…。

銀座の一等地で、商品や技術の紹介に徹し、万博のパビリオンみたいなソニービル。その潔さと鷹揚さは、元々銀座が持っていた「ガツガツしない落ち着き」を最後まで貫いたね。ふと気が付いたら様変わりの数寄屋橋交差点。次の建て直しは交番か不二家かもね。

東京プチアーカイブ

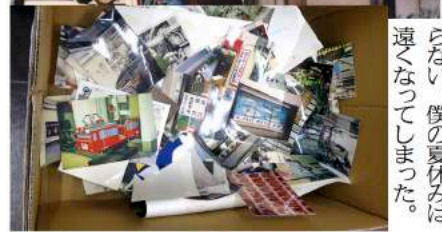
例によって旧実家から剥がした中途半端に古い写真から手繰る東京物語。

池袋北口と西口は似てるようで全然違う。どのくらい違つかというと、シネマロサとシネロマンくらい、カフェ・ド・バリと伯爵くらい違う。その駅前なのに深い北口の一角の裏っ手に、やたら広い駐車場がある。ここに異彩を放つビルがあった。何処まで繋がっていて、何処までが一棟なのかも分からないが、一階が店舗で、上が住居スペースになっている低層ビルだった。近所には杯一という大きなキャバレーがあり、「○○オンステーシ」的な看板が付いていた記憶があるの

で、演歌歌手でも営業に来てたかも知れない。子供の頃は西側に近づくことも皆無。ようやく学生時代から西口を歩き出す。北口を知るのにはビックカメラが出来るから。現在シネロマンがあるビルに、黎明期のビックカメラがあったはずだ。九十年代でも怖かった。まだ東京のあちこちにあった同潤会アパートとは全く雰囲気が違った。山手線の車窓からも、その異形はすぐ分かった。一階は既に空の窓はビシヤリと閉まつてるのに、裏に回ると洗濯物がどっさり下がってる風景が、一層不思議さを増していた。何故か銃砲店があつて、更に怖さか拍車をかけていた。どんな人が住むのかも分からない、裏側には強烈な生活感がある。漢然と「九龍城」を思い出した。

神宮球場で定時制通信制高校野球を見て、銀座線で浅草、蛇骨湯で小ぎつぱりしてからジローに行き、腹枴えをしたら演芸ホールに飛び込み、楽しそうな志ん朝さんの住吉踊りを見る。これが僕の夏休みだった。程よく焼いたハンバーガーのパンズの中身は、ソースで炒めたマカロニとソーセージ、薄いトンカツ、マヨネーズで和えた微塵切りの茹で卵、そしてハンバーグ。どう見てもハンバーガーだけど、ジローでは「お好みホットドック」なのだ。これとホワイトシチュー、それもササッと作るやつ……。

一年季の入った喫茶店という佇まいの店内。一番奥に小ぶりのカウンタアがあって、後ろの棚にはパンホーテンココアの缶が並んでいた。「今日は、これですか？」と、小池朝湯は綺麗になり、志ん朝さんにはもう会えない。演芸ホールだけが変わらない。僕の夏休みは遠くへなつてしまった。





はかをする
と危ないので
産に入らない
で下さい。

坂地区南部公園事務所



土墨ありバカ殿は無し志村城 梅里



いにしえは薄暗がりの崖の奥
今様石垣タイムスリップ数百年



二の丸は熊野の烏が守る由

志村城の旅



城郭を囲む団地難攻不落

高級句誌
俳人同様
Haijin Doyo
三朝庵梅里・筆
SAN CHO AN BAI RI

三田線志村三丁目、駅前パチンコ通りにコジマ、サミットどれもが大型店、目の前環八大通り、バス操車場に郵便局と、大味施設が目白押し、ガツカリ帰るは素人で、木々こんもりと茂るのは、中世城郭志村城、志村ながし千葉某が、居城にしたとかしないとか、歴史は二の次三の次、志村のお城の名残を

と、屋敷門にも似せたるか、入り口潜れば城山公園、崖は登るな入るなど、立て看板もここに、雑木林か里山か、その鬱蒼が心地よく、傾斜激しき崖伝い、階段上れば熊野のお宮、城在りし頃に本家より、分詞したとか故実あり、社殿の裏も木々茂り、緑に埋もれているけれど、起伏は土墨の面影が、確かに確認出来るとは、ここはホントに板橋区？熊野神社は二の丸で、隣に志村小学校、ここが本丸跡地とか、裏に周りにて坂降りりや、見上げるばかりの石垣は、残念今の土留だが、よくぞ連んだ崖の上、難攻不落の匂いして、広がる団地も要塞の、堅固な防御システムに、見える不思議な志村城。近くに控える御成塚、引き立て役と思いつつ、旨い饅頭を手繰り帰路。

北口番外編
東京大塚カウンター異聞
K'sバーの人々

『お代わり自由、持ち込み自由、注文せすに帰るのも自由』
…あのKというバーのメニューの言葉が、僕の頭の中から離れない。高校生に元高校生に近所のおばちゃん。これが商売と言えるのだろうか？ こんなことで鐘ヶ淵さんが暮らしているとは思えない。それにしても、あんな所にバーなんかあったかな？

* * *

「もしもし、鐘ヶ淵さんですか？」「はいはい、ああペンギンさんですね」「昨日は長々失礼しました」「いえいえ、何だかお仕事の邪魔をしてしまったように…。だよね、たっぷり二時間は引き留

められたからなあ。「あのご注文のガラスなんですけど、引き手の部分、彫ってあるでしょう？」「ええ、しかし普通にも長方形じゃなくて、丸みがあって真ん中から左右に彫り分けてある」「細長い小判みたいな形でね」「あれ、うちが取引してる工場じゃ作ってこれないんです。普通に長方形の溝でもいいですか？」「そつですか、もう桃割れは作れないんですかね」「……えっ、僕は焦った。同業者でも若い子だったら聞いたこと無いかも知れないのに、いきなりの桃割れって…」

左右に膨らみを持たせて彫る引き手を、桃割れというんだ。日本髪のかき方みたいだけど、左右に分けて膨らんでから付いたんだらう。随分と粋な名前にしたもんだ。形が似てるから柿の種っていう人もいたけど、桃割れのがずっと色っぽい。ガラスなんて無機質でシャレの効かないものに、柔らかな言葉を当てる大先輩たちは、きつと良い遊びをしてたんだらうな。
「もしもしペンギンさん、ど

うしました？」「あの、鐘ヶ淵さん、何故桃割れなんて知ってるんですかあ？」「アハハハ、何ですかねえ。昔本で読んだのかも。嘘だ。ガラスの引き手の彫り方が、本に出てくる訳がない。「そつですか、そこかも知れませんがね（絶対嘘！）。ですんで普通の細長い彫り方になっちゃいますが、「構いませんよ。要は開け閉めできりゃいいんですから」「じゃあ出てきたらご連絡します」「宜しくお願いします」。

ガラス加工工場に注文ファックスを流して、僕は改めて引き上げてきた割れた引き戸ガラスを眺めた。普通の桃割れは、確かに桃二つ割りというよりも、柿の種二つ割りに感じの、細長い引き手ばかりだったけど、鐘ヶ淵さんとこの彫り方は、うんと左右に膨らんだ、見事な桃割れ。

僕が子供の頃は、街場のガラス加工所ってのがあちこちにあった。テーブルに乗せるためのガラスの周囲を磨くとか、ボカシと言って、一枚のガラス板の途中までを曇りに

する加工は、みんなそういう加工所で作って貰ってたんだ。サイズに合わせて切ったガラスを加工屋さんに渡すと、指示通りに磨いたりぼかししたり、引き手を彫ったりしてくれる。うちですつと頼んでたのは、根津にあったダイモンさんという店で、『はん亭』という串揚げの有名店の近所にあった。

ダイモンさんは親父の若い頃からの同業者仲間で、毎日のようにトラックでうちに来てガラスを積み、出来上がった加工物を降ろしていった。部屋の間仕切りや玄関の木製建具には、よくボカシガラスが入ってたんだ。例えば八十センチ角くらいの透明ガラスの途中に、親父がマジックで波型の線を引き、矢印をともに「257」なんて数字を書き込む。これは矢印方向か

ら波型線まで、二尺五寸七分止まりでボカシにしてくれて指示。スタートは真っ白な曇りガラスで、途中から徐々にクラテーションに始め、二尺五寸七分のところで透明になるようにぼかすつてこと。ボカシ方までは知らないけど、細かい砂を吹き付けて表面を白くするんだと思う。

だっ広い土間に大きな機械、いつも水びたして機械の音が喧しい…、親父と一緒にダイモンさんの工場に行くところいう印象しかなかった。桃割れも沢山作って貰ったし、変な加工物もみんなダイモンさんだった…。

* * *

「あの、すいません。ペンギンさんてあなたですか？」「店のドアが開いて、女の子の声がかんこえた。わつ、可愛い！

編集後記のようなもの

来る四月三十日、不忍通りを中心とした谷根千束隈、恒例の一箱

古本市が開催されます。今や日本中で開かれるようになったイベントの元祖がここ。今年はずっと僕もペンギン書店として

浅草・珈琲アロマ。

★配布協力感謝：千駄木・古書はらうろく、吉祥寺・ブックスルーエ、雑司が谷・旅猫雑貨店、法善寺横丁・洋酒の店路、築地・ふげん社。